

河内版・春や春

koyasatobito

「おやっさん！もうそろそろ、あの……」

おれがこう頭を搔きもって、ええ年頃になったことやし婚礼の式を挙げとおくんなはれ、とゆうと、返事はいつも、

「何をゆうてんのや！婚礼の何のとゆうたかて、もっと大きならなあかんがな！」
とゆうのが口癖や。

この大きならなあかんちゅうのは、おれのことやない、いくいくおれの嫁になるチョムスニの背丈のことや。

おれがこの家に来てから、一銭の金も受け取らんと働き通しで、三年と満七ヵ月が過ぎた。それやのに、まだ大きならへんちゅうことは、いったいこの背丈はいつになったら伸びることやら、ほんまにわけがわからへんわ。仕事をもっとようせなあかんとか、飯を（ぎょうさん食べるちゅうていつも心配らしい）ちょっと少ないめに食べなあかんとかゆうたら、おれかてなんぼでも言い分がある。せやけど、チョムスニがまだ年端もゆかん娘やさかい、もっと大きならなあかんとゆわれたら、どもならん、ただあきれてしまうばっかしや。

こうして、おれは最初の契約が間違うてたのに気がついた。二年なら二年、三年なら三年と期間をきっちり決めてから、仕事をするべきやったんや。とにかく娘が大きになったら婚礼の式を挙げてやるちゅうことやったんや。せやけど、誰かがいつも見張り番をしているわけやなし、その背丈がいつ伸びるのかわかるもんけ。そやけど、おれは人の背丈はすくすく伸びるもんやと思うてたのに、寸詰まりの背丈に横にばかり膨らんでゆく身体もあるやなんて知るわけがないわ。時が来たら、おやっさんかて間違いないやろうと思うて、文句もゆわんと素直に働いてきたんや。それやったら、おやっさんも自分で得心して、「おお、よう働いてくれた。そろそろ婚礼の式を挙げてやるか」と、所帯を持たせてくれさえしたら、おれかて嬉しいやないけ。それを、知らんぷりをして、そんなことをゆわへんかと、ゆわん先から慌てくさりよる。一応はれっきとした入り婿やねんけど、働こうにもオモロくないし、こんなんでは何が何やらわからへん。

アホみたいに、そんなことも知らんと、チョムスニの背丈が伸びるのを、ずっとこせ待ってたんや。

いつやったか、無性にはがいいので、物差を手に飛びかかって、あいつの背丈をいっぺん計ってみたらかと思うたりした。せやけど、おやっさんが男女の仲にうるさいよって、面と向こうて話をするやなんて思いもよらんことや。井戸端へ行く途中でたまたま出会う時には、なんとか目測で計ってみたりするが、その度におれは、ちょっと行き過ぎてから、

「ちえっ、あいつの背丈はどないなってんねん！」

と、田んぼの畔に唾をペツと吐いてしまう。どうひいき目に見ても、おれの脇の下（他の人よりはちょっとは大きい）を超えるか超えへんかで、いつも変わりなしや。犬や豚はすくすく大きなるのに、なんで人間はこんなに大きならへんねん。頭が痛うなるほど考えてみたこともある。はは一ん、水瓶をしょちゅう頭に載せて運ぶさかい骨が縮んでしまうのかと思うて、こっそりおれが代わりに水を汲んでやったりもした。それだけやない、薪を取りに行たら、祠に石を積

んで、「チョムスニの背丈をちょっと大きして下さいませ、ほたら今度はお餅を供えてお参りします」と、祈ったのも一度や二度ではない。いったいこの背丈はどないなってるのか、これでも効き目がないとは……。

それで、きのう喧嘩になってんけど、決しておやっさんが憎いとかゆうわけやない。

苗代に粃を播きもって考えてみたら、またオモロない。この稲が育って、チョムスニが食べて、ちょっとでも大きくなるならええけど、そうはならへんものを植えてどないすんねん。年を追うて前にせり出すおやっさんの下腹（が、食べ過ぎなのを知らんと病気やなんてゆうてるが、その腹）を膨らませるために植えとうはない。

「ウァー、腹が痛あ」

おれは粃を播くのを止めて、腹をさすりもって田んぼの畔に這い上がった。それから、脇に抱えてた粃の入った箕をそのままドサッと地面に放り出して、おれもドサッと座り込んだ。なんぼ仕事が忙しいゆうたかて、おれがハライタになったらそれまでや。病気になったもんが仕事なんかするかあ。青々と生い茂った雑草を一握り引き千切って、足に吸い付いたヒルをごしごし擦り落としもって、おやっさんの顔を見た。

田んぼの中で、おやっさんもケツタイな目えでしばらくおれを睨んでたが、

「おい、おどれはまた何をさらしてんねん！」

「腹がちょっと痛うて！」

と、草むらの上にそおっと倒れ込んだら、おやっさんは腹を立てよった。自分も田んぼからジャブジャブ畔に上がって来よったが、いきなりおれの胸倉をつかんで、ほおべたを張り飛ばすやないけ……。

「このガキ、仕事を放り出しやがって、わしを困らすつもりけえ？このどたまかち割ったるか」

おやっさんは癩癩を起こすと、すぐに手えを出す悪い癖がある。それに媚に向こうてガキとかおどれとかゆう舅がどこにいるねん。せやから、この村ではどんな人でもおやっさんに悪口をゆわれんもんは長生きでけへん、とゆわれるほどやねん。ちっこい子供らかて、おやっさんのことを陰では悪口ピリ（本名がポンピリやさかい）、悪口ピリ、ちゅうて後ろ指を指すほど、村じゅうで評判を落としてたんや。せやけど、ほんまに評判を落としたちゅうのは、悪口よりも、村の裴参奉〔ペー・チャムボン〕という地主の小作管理人としてや。だいたい小作管理人ちゅうもんは、口が悪うて他人を平気で殴るし、見かけも獰猛な犬みたいやないと使いもんにならんちゅうが、おやっさんの顔つきはぴったりやった。おやっさんに鶏の一羽も届けて来えへんとか、田打ちを手伝わへんとかしようものなら、その年の秋には、小作地は間違いのうきれいに取り上げられよる。そうなると、前もって金をつかませたり酒を飲ませたりして、うまく立ち回ってた奴が、その土地をまんまと手に入れやがんねん。こうゆういきさつで、おやっさんとこの空っぽの牛小屋には、目玉のおっきい牛が一頭のそのそ勝手に入って来よるし、村の人らは悪口をゆわれながら、相も変わらずペコペコしてるやないけ……。

せやけど、おれに対してはおやっさんも大きなことはゆえん立場や。

後先かまわずほおべたを一発バシッと殴っというて、おやっさんはグツが悪そうに黙って苦り切った顔をしよる。おれにはおやっさんの腹の底がよう分かってる。もうすぐ、ナラガシワの葉あ〔

堆肥にする] も刈り取らなあかんし、田植えもせなあかんし、この忙しい盛りに、おれが仕事をせず実家へいんでしもたらそれまでやさかい。

去年の今時分もちょっとごねたら、起きるのが遅いちゅうて石を投げつけられ、寝てたおれは足首をくじいてしもうた。三日も四日も大げさにうんうん唸ってたら、とうとう泣き面になりよったやないけ……。

「おい、もうまあ起きて仕事をせえや。ほたら、この秋に稲がようできたら婚礼の式が挙げられるやないけ」

それでや、うまい話に乗せられてその日いから起きて、並みの人間なら二日かかる田あを一人で一日で耕してしもうたところ、おやっさんも目えをまん丸うにしてたまげよった。それやったら、ほんまに秋になったら式を挙げてくれるのが道理やないけ。ところがや、米俵をちゃっちゃと取り入れて積んでも、肝心なことはゆわんと、水瓶を頭に載せて入って来るチョムスニを煙管で指しもって、

「見てみい、この娘がもっと大きならんことには、これで嫁入りの何のゆうてもなあ！」と、人をこばかにしてお仕舞いや。腹立ちまぎれに、このくそ親父め、と軒下の敷石に背負い投げで叩き付けといて、故郷へ逃げて帰ろかと思うたが、ぐっと我慢をしたんや。ほんまに、おれはこんなざまでは実家に帰られへん。婿入りに行て、アホンダラがおめおめ追い出されたかと、後ろ指を指されるだけやさかい……。

畔からパツと立ち上がって、意気の上がらんおやっさんのネキに寄って、
「おれはもう帰るで。これまでの手当てを出しとくなはれ」
「おどれは婿に来たんやで、作男に来たんちゃうやろ？」
「ほたら、早よ婚礼の式を挙げてくれたらええやんけ。朝から晩までこき使うといて、してやる、してやると……」

「あんなあ、わしがしてやらのやない、娘が大きならんさけえ……」

と、のろのろ煙管に煙草を詰めもっていつもの話を並べ立てよる。

こんなやり方では、いっつもおれが損をするばかりや。これでは埒が明かんさかい、すぐに区長さんそこへ談判に行こやないかと袖を引っ張った。

「アッこのガキ、目上のもんに何さらすねん」

行かへんちゅうて足を踏ん張って逆ろうたかて、おやっさんがおれの力に敵うもんか。メチャクチャこき使うておいて、娘はくれへんし、その上がみがみゆうとはいったい何事や……
せやけど、おれはほんまにおやっさんが憎うてこんなことするんやない。

この前、おれが峠の向こ側の峰にある焼き畑を一人で耕してたときやった。畑の端に来る度に、何ともいえん花の匂いがぷんぷん鼻をついて、頭の上で蜂が時々ぶんぶん音を立てよる。岩の隙間から湧き出る水の音しか聞こえへん谷間やさかい、澄みきった空の春の日差しは寝床の中のように温うて、夢でも見てるみたいや。おれは身体がけだるうて（過労はまだ知らんが）病気にな

りかけてこないになるんかと、胸がドキドキしてきよった。

「ほれほれ！ほれ！ほーほー……」

こうして掛け声をかけもって牛を追うてたら、いつもなら肩がうきうきしてくるもんや。それがどうゆうわけか、畑を半分も耕さんうちに身体中の力が抜けて、いらつくばっかしや。やたらに牛を叩きもって、

「アホ！アホ！このクタバリゾコナイの牛め（おやっさんの牛やさかい）足をへし折ったるか」
せやけど、実のところこのアホ牛のせいやのうて、昼食を頭に載せて運んで来たチョムスニの背丈を見て腹が立ったんや。

チョムスニはとりわけベッピンとゆうわけやない。とゆうてブスカといえは、そうでもない。おれの嫁になるにはちょうどええ、ママアの顔立ちや。おれより十歳下やから今年十六になるが、身体はよその娘より二歳ほど小さい。よその娘はすんなり伸びてるのに、こいつは上下がちょっと寸詰まりなのが、おれの目えには、ちょうど柿瓜のように見える。マクワウリの中でもこの柿瓜がいちばん味がええし、カイラシイからや。丸うて大きな目えはやさしげでええし、口はちょっと上向きかげんやけど、飯の食いはぐれがなさそうでええ。そうや、飯さえぎょうさん食えたら結構な巡り合わせやないけ。ところで、ひとつだけ欠点があるとしたら、たんまに、身体が（おやっさんはこれを、ちょこまかしてみっともないとゆうが）あんまり速く動き回ることや。せやから、飯を運ぶ途中でしょっちゅう草むらに放り出しては、土まみれの飯を食わせやがんねん。食わへんかったら恥をかかせるんやないかと思うて、これを噛んでたら、ガリガリ音がして石を食べてんのか、飯を食べてんのか……。

ところが、今日はどうゆうわけか何事もなしに無傷の飯を畑の端に降ろしよった。それからまた男女が顔を合わせたらあかんさかいに、ちょっと離れて、こっちに背中を向けてしゃがんだまま器があくのを待っていよる。

おれが食べ終わって離れると、近寄って来て器を片付けだした。ところで、おれはびっくり仰天してしもうた。俯いて食器入れに器を重ねて入れもって、おれに聞かせるつもりか、独り言か、
「朝から晩まで働くばっかしで終る気いかいな！」

と、一人でぶつぶつゆうてるやないけ。今までずっと顔もまともに見いへんかったのに、これはどうゆうことやと、おれは面食ろうてしもうた。けど、一方では何かええ話でもあるかと思うて、おれも空に向こうて独り言で、

「ほたら、どないしたらええねん？」

とゆうと、

「婚礼の式を挙げさせてくれゆうたらええやんけ、ほんまに」
きっぱり言い放つと、顔を赤うして山の方へ逃げて行きよった。

おれはしばらくの間、どないなってるんのかわけが分からんまま、後ろ姿をぼんやり眺めているばっかしやった。

春になったら、あらゆる草木が水分を吸い上げて芽ぐみだす。人間もおそらく同じやろなあと思うて、この何日かのうちに、めっきり（おれの感じで）成長したように見えるチョムスニがなんとも嬉しいことやないけ。

こんな娘を、まだ幼いやなんてぬけぬけとぬかしやがって……。

おれとおやっさんが区長さんそこへ行たとき、区長さんは枝折戸の外にある豚小屋で餌をやっている最中やった。ちょっとソウルへ行てきたら、人間は威厳がないとあかんちゅうて、左右にピンと伸ばした口ひげ（ちょっと見いには、屋根の上に止まってるツバメのしっぽみたいや）をいっつもエッヘンとなでる癖がつきよった。しばらく、きょとんと目を見張っておれらを見つめてたが、何か感付いたのか、

「仕事の途中で何事や？」

とゆうと、手を上げてあのエッヘンをひとつやりよった。

「区長さん、うちのおやっさんと最初に契約したのは……」

先駆けしようとするおやっさんを後に押し退けて、おれは急ぎ込んで話しかけたが、はたと気がついて、

「いえ、うちのお舅さまと最初に……」

と、初めから言い直した。おやっさんはお舅さまとゆわへんかったら嫌がりよんねん。せやさかい外でおやっさんゆうたら、無性に腹を立てよる。蛇かて「へび」ゆわれたらええ気いはせえへんやろ、人聞きが悪いさかい他人が聞いとるそこではお舅さま、お姑さまゆえちゅうて、厳しい注意を受けてきたのに、そんなもん右から左へ筒抜けや。さっきもおやっさんゆうたら、脇から足の甲をぎゅうっと踏まれて、横目で睨まれた拍子にようよう思い出した……。

区長さんも、おれの言い分を子細に聞いて、気の毒に思うたらしい。そら区長さんだけやない、誰かてみなそう思うはずや。長ごうに伸ばした小指の爪で鼻くそをほじくってポンと弾いてから、

「それやったら、ポンピリはん！早よ式を挙げてやりなはれ、こんなにしたいゆうてるんやさかい……」

と、おれが思うてたとおりの返事やった。ところが、これを聞いたおやっさんが手えを振り回しながら目えをむいて、

「婚礼の何のゆうたかて、娘が大きならんかったら、どうにもならんやおまへんか？」

と食って掛かると、その剣幕に圧倒されてチッチッと舌打ちするばかりやないけ……。

「それも、そうやなあ！」

「そやけど、四年近くたっても伸びへんのに、あいつの背丈はいつ伸びまんねん？もうなかったことにして、手当を出しとくなはれ……」

「なんやこのガキ！わしが大きなるなゆうたか、わしにどうせえちゅうねん？」

「お姑さまは、雀みたいに小さいのに、ちゃん子供を産んでるやんけ？（ほんまに、おかあはんはチョムスニの耳までしかない）」

これを聞いたおやっさんは、カラカラ笑うと（しかし、どう見ても苦虫をかみつぶしたような表情や）、鼻をかむ振りをして、おれに嫌がらせをしようと肘で脇腹をドスンと突きやがった。汚いことをさらす。おれもふくらはぎのハエを追い払う振りをして、腰を屈めもって肩でおやっさんの尻をドスンと突き飛ばしたった。おやっさんは前のめりにヨタヨタと枝折戸の方へ倒れか

けたが、ようよう立ち直ると、恐い目えで睨み付けよった。このガキ！といたいとこやねんけど、他人の目の前やさかい、そもゆえんと突っ立ってるざまは何ともええ気味やった。

せやけど、この他にはこれというめぼしい決着も付かへんまま、また田んぼに戻って粃を播いた。何でやゆうたら、おやっさんが何かひそひそ耳打ちをしてから帰った後、区長さんがおれのために、こっそりこんなことをゆうてくれたからや。（ムンテのゆうには、区長さんはおやっさんから田あを二反借りて耕してるから、おれを丸め込もうとしたんやとゆうが、おれはそうは思うてへん）

「おまえのゆうことにも一理ある。もちろん、ええ年頃やさけえ早よ息子がほしいとゆうのも当たり前のことや。せやけどなあ、田畑の仕事がいちばん忙しいときに、仕事をせえへんとか実家に逃げて帰るとかしたら、損害罪で懲役に行かんならんのやで！（これにはちょっとたまげた）ほれ、こないだサンポ村で山に火いを付けたちゅうて懲役になったやんけ。自分の山に火いを付けても懲役に行かんならんこの時世に、他人の田畑をワヤクチャにしたら、罪がどれだけ重いことやろなあ。へてから、おまえは訴えを起こすちゅうことやが（手当をもらうために訴えるゆうてん）、そんなことしたら、わざわざ罪をかぶりに行くようなもんや。また結婚かてそうや。法律に成年ちゅうもんがあつてなあ、二十一歳になるまで結婚でけんようになってんねん。おまえは、もちろん息子の誕生が遅れるのが心配やろうが、チョムスニゆうたら今やと十六やないけ。せやけど、さっきのポンピリはんの話では、この秋には何を差し置いても結婚させてやるゆうてはるねんから、ありがたいことやないけ。早よ行て粃播きを済ませてしまえ。ぐずぐずゆわんと、早よ行け……」

そうゆうわけで、今朝まで文句もゆわんとやってきたんや。

おやっさんとおれが喧嘩したんは、今になって考えてみたら、まったく思いの外のことやたとゆうしかない。おやっさんにしてみれば、このごろ小作人らにちょっと威張ってみとうて、

＜金さえあつたら殿様や、文句があるか！＞

と、わざわざ下腹をぐいっと突き出して、のっしのっしと闊歩するちゅうありさまや。おれみたいな小物を痛めつけて、せっかく他人の土地で築き上げた家門を滅ぼしてしまうような人やない。それに、おれとしても、何が何でも気に入られてチョムスニと早よ一緒にならなあかんやないか……。

こうなってみると、結局は昨日の晩ムンテのそこへ遊びに行たのが間違いやった。昼間に、区長さんの前でおやっさんとおれが喧嘩したのをなんで知ったんか、しきりに嫌味なことをぬかすやないか。

「ほんで、殴られても黙ってんのか」

「ほたら、どないせえちゅうねん」

「アホか、ポンピリを苗代に逆落として投げ込んだれ、どうもこうもあらへんがな」

と、おれの代わりにやたらに腹を立てて拳骨を振り回しているうちに、灯蓋〔油皿〕まで吹っ飛ばしてしまいよった。この男は元々気性が荒い方やねんけど、自分でやったくせにおれに石油代を弁償せえちゅうてゴテよった。おれがあきれ果てて黙って座ってたら、あいつ一人で騒々し

くしゃべくりよった。

「いつまでも仕事ばっかししてやるつもりか」

「ヨンドギは一年働いて所帯を持ったんやで、おまえは四年にもなるちゅうのにまだ働く気いかな？」

「おまえはなあ、三人目の婿やちゅうこと分かってるか、三人目の婿や」

「他人のことでも腹が立つわ、この野郎。井戸にはまって死んでまえ」

仕舞いには、首を爪で搔き切っしてしまえちゅうて、自分の息子みたいにやたらにポンポンいいたい放題や。いろんなことをゆうたので、そのまま話すことはできへんが、その内容はあらましこのとおりや……。

おやっさんには娘が三人いてるが、上の娘はおととしの秋に嫁に行きよった。実は嫁に行たのやのうて、その娘も婿を入れておいて分家させてやったちゅうことや。ところで、その娘が十歳のときから十九歳まで、つまり十年間も婿を次から次へと入れ替えて、村では婿大尽ちゅうて有名になりよったが、十四人とはほんまに多すぎる。おやっさんには息子がなくて、娘ばかりやさかいに、その次ぎの娘に婿を決めて迎えるまでは、こき使わなあかんちゅうことや。もちろん作男を置いたらええねんけど、それには金がかかるよって、仕事をようする婿を選ぶために次々に入れ替えたんや。婿になる方でも、しょっちゅう悪口を浴びせられるし、メチャクチャこき使われるさかい、腹を立てて次から次へと逃げ出したんやろ。チョムスニは二番目の娘やねんけど、おれはその三人目の婿として来たちゅうわけや。おれの次ぎに四人目の婿が来るとこやねんけど、おれは仕事もほんまにようするし、人柄がちょっと素直すぎる方やさかい、おやっさんがしっかり捕まえて放さへんねん。三番目の娘はまだ六歳で、せめて十歳にならんことには入り婿を取れへんよって、その間はビシビシこき使わんならん。せやさかいに、今こそしっかり腹を決めて所帯を持たせてくれと食い下がれ、ちゅうことや。

おれは、ウン、ウンと上の空で聞いてた。ムンテは、田畑を取り上げられてからとゆうもの、おやっさんのこととなるとやたらに喚き散らす。それも、おやっさんが譲ってくれゆうたときに、自分の家で大事にしていた冠（昔、郡守さまが被っていたとかゆう、脇にポロポロ虫食いの穴があるポロ）を気持ようにやってたら、そんなことにはならへんかったはずやねんけど……。

けど、おれはムンテのゆうことを、そっくりそのまま真あに受けたりはせえへんかった。真あに受けてたら、昨日の晩、帰ってからおやっさんと喧嘩になって無事には収まらんかったやろう。そうになったら、娘にまで信用を失うたおやっさん一人だけが悪者や。

実のところ、おれはチョムスニが朝の食膳を運んで来るまでは、今日はまた飯をどんだけ盛ってるかと、そればかり考えてた。食膳には汁と醤油と粟飯一膳と、それから飯よりもっとぎょうさん盛った山菜一鉢、こんなもんやった。山菜はチョムスニが暇を見つけて採って来るさかい、二鉢でも四鉢でも好きなだけ食うてもええが、飯は、おやっさんが一膳しかやったらあかんちゅうことで御代わりはなしや。ところでや、チョムスニが食膳をおれの前に置きもって、独り言をつぶやきよった。

「区長さんどこへ行て、手ぶらで帰って来たやなんて！」

と、せんだって山でゆうたように強い調子でぶつぶつぬかしよる。確かに、おれがもっと強硬に食い下がらんかったんは、ちょっと間あの抜けたことやったと、内心そう思うた。おれも反対側の壁の方へ顔を向けもって独り言で、

「あかんちゅうもんを、どうせえちゅうねん！」

とゆうたら、

「ひげをつかんで引っ張ったらええやんけ、あほんだら！」

と、また顔を赤らめながら腹を立てて、ふてくされた態度で奥へ入って行くやないか。このとき、誰も見てへんかったからよかったが、誰かが見てたら、おれの顔は親鳥を亡くしたコウノトリの雛みたいに哀れっぽかったに違いない。

実際、このときほど悲しかったことはまたとなかった。他のやつらになんぼアホやとゆわれたかて平気や、せやけど、おれの嫁になるはずのチョムスニにアホバカと思われたら、おれの面目は丸つぶれや。飯を食うてから、チゲを背負うて仕事に出かけようとしたが、また降ろして投出した。それから表の庭先の筵の上に寝そべって、おれはいっそのこと死んだ方がましやないかと考えた。

おれが仕事をしなかったら、おやっさんは年寄りで働けんさかい、結局は田畑の耕作ができんようになってしまう。後ろ手を組んでげっぷをしながら大門の外へ出て来たおやっさんは、おれを見つけると、

「このガキ！おどれはまた何をさらしてんねん？」

「食あたりでんねん、うあー腹が痛あ！」

「たらふく飯を食ろうてからに、何が食あたりや。ひとの田畑をワヤにしたら懲役やで」

「行てもええわい、うあー腹が痛あ！」

ほんまに、おれは仕事をせんと、懲役に行てもええと思うた。将来息子がでけても、息子の前でアホバカ呼ばわりされるくらいなら、今日は何がなんでも決着をつけなあかんと思うた。

おやっさんが起きいちゅうても、そのまま寝転んでたら、目えを三角にして向こうへ行たと思うたら、背負い子のつかい棒を持って来よった。ほてから、その棒でおれの腰をまるで石を持ち上げてひっくり返すように、ぐいぐい突いては、ひっくり返しひっくり返ししやがる。飯を腹いっぱい食うてぱんぱんに膨らんだ腹が、その度に揺さぶられて固とうなったハラワタが張り裂けそうでたまらん。それでも起きへんかったところ、今度は棒で腹を上からぐいぐい突いたり、足先で脇腹を蹴ったりしやがる。おやっさんは元々から意地が悪い方やねんけど、おれかて負けんように腹を据えた。痛いのを目えをぐっと閉じて我慢し、やれるほどやってみい、おもしろいやんけ、ちゅう気いでいたが、尻べたを思いきりどやされたときには、思わず跳ね起きて、おやっさんのひげをつかんで引っ張ってやった。せやけど、おれは腹を立てたんやない、ほんまは、さっきから台所の裏の垣根の隙間からチョムスニが二人の様子をこっそり覗き見してたからや。それでのうても、満足に口答えのひとつもできへんちゅうてアホ扱いされているのに、黙って棒で叩かれるのを見たら、ほんまのアホと思うやないけ。それに、チョムスニかて憎らしい思うてるこんなおやっさんなんか、おれにとっては何でもないねん。せやから思いきり殴ってもええねんけど、手加減して、ひげだけ引っ張って（願いどおりにしてやったんやさかい、チョムスニか

てさぞ喜んだやろう) 向こうまでよう聞こえるように、

「このひげ焼いたるか！」

と、声を張り上げた。

おやっさんは、ますます頭に血いのがのぼって、いきなり棒でおれの肩を殴り付けた。目えが眩んだ。もういっぺん顔を上げたときには、おれも頭に来た。このクソオヤジと、腹立ちまぎれに崖下の畑に突き落とした。しばらくして、おやっさんが一丁やり返したろうとハアハア息を弾ませもって這い上がって来るのを、また突き落とした。

這い上がったら転がし、転がったら這い上がり、これを四、五回も繰り返す度に、

「こき使うばっかしで、なんで式を挙げてくれへんねん？」

おれはこう喚いた。せやけど、おやっさんがあっさりと、<よっしゃ明日にでも式を挙げてやろう>とゆうてくれたら、おれかてこんなヒチメンドクサイことは止めたかも知れへん。こうなったら、おれかて殴ったんやないさかい、後になって、舅を殴ったちゅう汚名を着せられることはないやろし、なんぼやったかてええねん。

そのうち、おやっさんが喘ぎもって這い上がって来て、おれの股ぐらを狙っていよったが、いきなりわしづかみにしてぶら下がるやないけ。アッと声が出て、それっきり目が眩んで周囲がぐるぐる回りだした。

「お舅さま！お舅さま！お舅さま！」

「このガキ！これでも喰らえ！これでも喰らえ！」

「アッ！アッ！じいさん！助けて、じいさん！」

と、両腕をばたばたさせる頃には額に脂汗が滲み出て、もうほんまに死ぬかと思うた。それでもおやっさんは放してくれへん。おれが地面に倒れてほとんど気絶しそうになってから、ようよう放してくれた。汚いことをしやがる。これでも舅とゆえるか？おれは、しばらくの間、起き上がれへんままへたり込んでた。ようやく顔を上げると（目えには何にも見えへんかった）手足をブルブル震わせながら、のそのそ這い寄っておやっさんの股ぐらをぎゅっと握り締めた。

おれが頭をかち割られるほど殴られたんはこのせいや。せやけど、ここがまたうちのおやっさんの格別にえらいとこや。普通の人なら手当てを払うてやってでも、すぐに追い出すとこやねんけど、頭の傷を火いをつけた綿で焼いてくれたうえに、ポケットに煙草を一袋入れてくれて、それから、

「この秋にはきつと式を挙げてやる。何もゆわんと向こうへ行て豆畑でもさっさと耕せ」

と、背中を叩いてくれる人がどこにいるか。

おれは、おやっさんがあんまりありがとうて、知らん間あに涙まで出よった。チョムスニを残して、もう追い出されるものと思うてたのに、思いがけない言葉を聞いて、

「お舅さま！もう二度とこんなことはいたしません……」

こう誓うと、大急ぎでチゲを背負うて畑へ出かけた。

ところがや、そのときはそんなことは知らんさかい、おやっさんを仇とばかり思うて、力いっ

ばい引張ったんや。

「アッ！アッ！このガキ！放せ、放せ……」

おやっさんは手を振り回しながら、トンビにさらわれた鶏みたいな声で喚きつづけよった。放すもんか、こうなったからにはとことん懲らしめたいろう思うて、もっと意地悪く引張ってやった。せやけど、おやっさんが地面に倒れて目えに涙が滲んでるのを見たら、ちょっと恐うなった。

「お助け！放してくれ、放せ、放せ、放せ、放せ」

それでも放さへんので、

「おうい、チョムスニ！チョムスニ！」

この悲鳴を聞いて、家の中にいたおかあはんとチョムスニがあたふたと飛び出して来よった。おれが思うには、おかあはんは自分の亭主やさかいに肩を持つかも知れん。せやけど、チョムスニはおれの味方をして、内心いい気味やと思うはずや……。ところが、いったいこれはどういうこっちゃ（いまだに、おれにはわけが分からへん）。おとうをひどい目えにあわせえ、と自分からゆうたくせに、今になって飛びかかって来て、

「ヒャア！このできぞこない、おとうを殺す気いか！」

と、おれの耳を後に引っ張ってわあわあ泣くやないけ。これですっかり力が抜けてしもて、おれは魂の抜けたデクノボウになってしもうた。おかあはんも飛びかかって来て、片方の耳を後に引っ張っては泣くやないか。

こうして身動きもできんようにしといて、おやっさんは棒を振り上げて思い切り振り下ろしやがった。しかし、おれはあえて避けようともせず、どうにも真意を計りかねるチョムスニの顔をボンヤリと見つめとった。

「アホンダラ！舅の口から〈お助け〉とゆわせるやなんて」

(1935年)